

レポート

「心・源氏大絵」

東京支部 山口クスイ

西欧で感じた日本の美

私が今の源氏物語をテーマに描き出したのは、実は四十八歳の時にヨーロッパ美術の研究旅行の際、西ドイツのミュンヘンの美術館で、「東洋美術が諸外国に与えた影響」展という展覧会を見て、日本の大和絵や浮世絵、墨絵が西欧の美術に与えた影響の大きさを、改めて目のあたりにしたからです。

以前からモネは好きだったのですが、それも実は自分が日本美にひかれていたからであることがそのときに判りました。そして私は



源氏物語『葵』80号  
佐賀県立美術館所蔵



【花の宴】 佐賀新聞社所蔵

日本人であり、女であり、母である。その魂を、心を自由自在に描こう。これからは自分の心の赴くままに筆を走らせようと決心したのです。

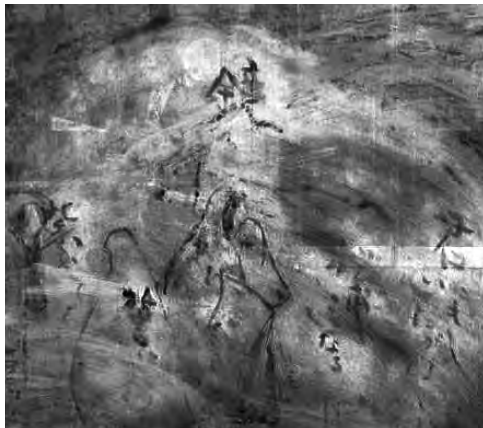
更にヨーロッパでは、日本画の傷みも随分目にしたので、油絵なら耐久性もありますから、幸い私は日本画も習得しているのです、日本画と洋画の技法を用い、絵具もそれぞれの特徴を活かして混合して使ってみました。油絵では珍しい金泥などの日本画の顔料を自由に取り入れ、空間の広がりなども日本古来の逆遠近法で表し、色も紫を基調にして描き、

日本の風土に融け合った油彩で、源氏物語絵巻をつくろうと試んでいます。

生かさせていただいていること

「自分が懂れていたのは『日本美』であった」と初めての欧州美術研修旅行にいった思い知らされて帰国後、従兄である能楽師の小野原弘明の秘曲「源氏供養（紫式部）」の舞を観賞する機会に恵まれました。

紫式部は、平安時代石山寺に籠もり、「源氏物語」を書きましたが、それを仏教の教義から解釈しますと、狂言綺語を弄して世を偽ったために、作者は成仏できず、思い悩み、石山寺に参詣に来た安居院の法印に源氏の供



【玉鬘 “鏡の神にかけて誓はむ”】  
佐賀県立アバンセ所蔵



『若菜』田澤義鋪記念館所蔵

養を頼み、自らの冥福をも祈ってもらいたいと頼みます。そこで法印が経を読み供養をすると、紫式部の霊現れて、月の夜半に紫の薄布を翻して報謝の舞を舞い、この中で人の世の無常を説くので、法印は、さてこそ紫式部は石山観世音の化身であり、また源氏物語を書いたのは、夢のこの世を人に知らせる方便であったかと悟るのです。「…そは石山観世音の化身とや…」ただ感動に打ち震え、これだ!!! これを描かねば。「日本の心」「祈りの心」をと決心しました。

早速百二十号の大作に取り組み、その顔を何回も何回も塗り、削り、それは石山観世音の顔であり、紫式部であり、舞っている従兄

の顔でもあると表現しなければならぬから…。

完成した「源氏供養（紫式部）」はその年（一九七三年）の創元展に出品し、京都展巡回の折、大本山石山寺座主、鷲尾隆輝師のお目にとまり、「この一枚の絵に能楽『源氏供養』のすべてが表現されている。自分が求めていた通りの絵がそこにあった」と、ご要望により宝物殿に奉納させていただきました。

その秋、寺では「紫式部展」が催され、私は先輩達と琵琶湖畔の石山寺を訪れました。

「絵」は観音本堂の石山観世音菩薩様の側面に紫式部の自画像と相対して陳列され、御観音様に供えられた長い

御燈明の揺らめきに照らされ、その幽玄に自ら驚きました。その頃、後輩から「あなたの絵に幽玄が加われは…」と勧められ、共に謡曲の稽古を始めていたので

す。早くも友情のありがたさが身にしました。従兄のありがたさも併せて。

座主は「今回宝物殿が



『源氏供養（紫式部）」大本山石山寺宝物殿所蔵



『篝火』佐賀県立美術館所蔵

完成して、今まで、日本画の源氏絵はかなり集めましたので、油絵のをほしいと願っていた矢先に、山口さんの絵に出会いました。去年は宝物殿が未完成で、来年では遅すぎるし、今探していたのです。皆さんはこれを偶然と思われるでしょうね。そうではありません。これは、ズーッとまえからの神仏のお計らいなのです」と結ばれました。

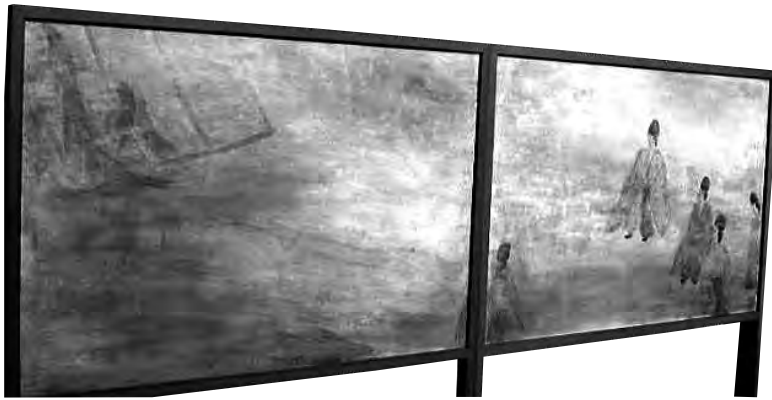
観音堂の側に日本で一番、位の高い龍神を祀った祠があることも知らされました。また、「観音の化身が龍神であり、龍神の化身が石である」こと。それゆえ石山寺は全国から集



『鈴蟲』山口氏本人所蔵

められた最高の石のみにより築かれていることも初めて知り得ました。

自分は自分の力で生きているのではなく、「生かさせていただいていること」と謙虚に受けとめて、源氏物語一筋に精進したいと念じてやみません。



『蹴鞠』鹿島市立北鹿島小学校所蔵



『薄雲』佐賀県立鹿島高校所蔵



『藤の裏葉』鹿島市役所所蔵